王政復古期の出版物と社会

～書籍商リチャード・チズウェルのブックリストに関して～

高野美千代

Books and Society in Restoration England :

Richard Chiswell's Booklists of 1680-1681

TAKANO Michiyo

Abstract

In Restoration England there was a change in the publication and printing of books; it was a time when more and more English people began reading books and consequently more printed materials were produced than before. Publishers began inserting advertisements at the bookends showing what they were selling and what was in the press. The lists presumably reflected what the publishers wanted to sell as well as what the readers might have been interested in. This study examines two booklists of a Restoration publisher Richard Chiswell. Chiswell was one of the most prominent booksellers of the day and the books he published covered a wide range of subjects. Through examination of Chiswell's booklists, we can gain insight into the demands of his readers and the relationship between books and society in Restoration England.

キーワード：王政復古期イングランド　リチャード・チズウェル　ブックリスト
Key words：Restoration England, Richard Chiswell, booklists

はじめに

王政復古期のイングランドでは様々な立場から宗教的論争が繰り広げられ、王立協会（Royal Society）設立により科学が進歩を遂げ、また、純文学では風刺詩や戯曲が好まれる風潮があった。そして、王政復古期は識字率の上昇や基本的生活の安定により、書籍等出版物が一般に普及するようになった時代である。印刷物は1ペニーほどのブロードサイドから数ポンドのフォリオまで、価格、内容ともに様々なものが出回っていた。*Dictionary of National Biography* で確認できるものだけでも、王政復古期ロンドンには40を超える主要書籍商がいた。実際に、1668年から1709年までのロンドン書籍商による出版物は、宗教書/神学書が全体の3～4割を占め、ついで多く発行されたのが歴史、数学、古典、詩という分類の順であった。[1)]

書籍商は出版物の宣伝をするために、ブックリストを作成するようになった。ブックリストは基本的には書籍の巻末に数ページにわたって挿入されており、イングランドでは17世紀半ばから見られるようになった。現在でも見られるような既刊案内または新刊紹介である。書籍商はそのときに宣伝したい本、売りたい本を選んでリストに掲載していた。したがってブックリストは当時の出

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニケーション学科
Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

版事情―読者の需要、市場の動向、時代の宗教的・思想的傾向―を反映する資料として豊かな情報を提供するものと推測できる。

この小論においては王政復古期の主要書籍商の一人であるリチャード・チズウェル（Richard Chiswell, 1640-1711）の1680年および1681年のブックリストを取り上げる。リスト上の書籍をサイズ・主題・著者別に分類し、この書籍商の出版物の傾向を分析し、さらに、それら出版物が書籍商個人の政治的または宗教的思想および王政復古期の時代性をいかに反映するものであるかを検証したい。[2)]

1．書籍商リチャード・チズウェルとブックリスト

リチャード・チズウェルは王政復古期イングランド有数の書籍商であり、本の出版および販売を行っていた。[3)] 彼はロンドンの書店街のひとつであるSt. Paul's Churchyardに“Rose and Crown”という店を構えていた。そこで商売を始めたのは1667年ころであるが、実際にはそれ以前の徒弟時代に初めての出版を行った。徒弟時代を含めれば、王政復古から18世紀初頭までの40年間以上、彼は出版業に携わっていた。

チズウェルは1640年ロンドンの紳士服小物商の息子として生まれ、1654年書籍商ジョン・シャーリー（John Shirley）のもと見習（apprentice）として出版の世界に足を踏み入れた。のちのチズウェルの成功から見れば、シャーリーはさほど有名ではない書籍商であった。1661年の徒弟時代に最初の出版物 *Mensa mystica*（著者 Simon Patrick）を世に出している。独立後、1667年には“Rose and Crown”で商売を始めているが、この店は1666年に亡くなったジョージ・トマスン（George Thomason）の店と考えられる。[4)]

チズウェルは宗教関連書籍で知られた書籍商であるが、その他様々な主題の書籍も出版している。English Short Title Catalogueによれば、チズウェルの出版物は800以上を数える。

この小論では二つの理由をもってチズウェルの1680年と1681年のブックリストを研究対象とする。まず、チズウェルのブックリストを対象とするのは王政復古期ロンドンにおいて40人ほどいたと考えられる主要書籍商の中でも彼の書籍商としてのキャリアが長く豊富であり、また彼が幅広い主題の出版物を扱ったことにある。様々な内容の書物を比較的偏らずに出版・販売してきた彼のリストからは時代の全体的な出版事情が概観できることが期待される。また、1680年ころの時期は書籍が一般に普及してきた時代であり、当時のブックリストを検証することでより広い読者層の需要・思想的傾向等を知ることができると推測できる。よってチズウェルの1680年・1681年のふたつのブックリストを分析し、王政復古期の出版事情を考察したい。

対象となる1680年のブックリストはギルバート・バーネット（Gilbert Burnet, 1643-1715）の *Some passages of the life and death of the right honourable John, Earl of Rochester who died the 26th of July, 1680* の巻末に印刷されたものを参照する。[5)] 著者のGilbert Burnetは英国国教会穏健派の司祭で、説教や同時代史など多くの著作をチズウェルの書店から世に送り出している。*DNB* によればチズウェルにとってもバーネットは重要な著者の一人であった。この本は王政復古期に奔放な生活をした貴族として名をはせた詩人ジョン・ウィルモット、ロチェスター卿（John Wilmot, Earl of Rochester, 1647-1680）の死の床での告悔の記録である。実際に面会して語り合ったバーネットは、ロチェスターが死を前にして生涯を語り、罪を悔い改め、懐疑主義から英国国教会へと改宗したことを記している。王政復古期イングランドにおいてあれほど放蕩者として知られた男が、臨終の際には改心し、英国国教会へ帰依するというドラマティックな展開は当時の人々に大いなる影響を与えたと同時に国教会の存在感を際立たせるものとなった。

1681年のリストはロバート・ノックス（Robert Knox, 1640?-1720）の *An Historical Relation of the Island Ceylon in the East Indies* の巻末のものとする。著者のノックスは父親の商売の関係で少年時代から遠くインドあたりまで航海した経験を持っていた。この作品は著者が航海の途

中でセイロンにおいて国王の軍隊の捕虜になり、19年間の軟禁生活を強いられた経験から書かれたものである。彼はセイロンで長期滞在をする中で地域・人々・土地の生活を熟知したため母国へ戻る際にそれを本にまとめるよう人に勧められ執筆をした。イングランド帰国後ノックスはこの本によって多くの読者に遠い異国の文明を紹介することとなったが、本は1681年に出版されるや話題となり、のちに数ヶ国語に翻訳もされた。当時の読者の心に、外国への関心、特に見知らぬ場所、遠い国の文明への憧憬があったことを証明するものである。

上記2冊の本はともに評判となった作品である。それゆえブックリストも多くの人の目に触れたことになる。イングランドでは17世紀の末ごろには30パーセントの男性が読み書きをすることができたといわれ、書籍業はますます発展を遂げていった時代であり、書籍業者にとってブックリストで出版物の宣伝を効果的に行うことは商売を左右することにもなったといえよう。[6]

2．書籍の分類

チズウェルの1680年と1681年のブックリスト上の書籍は、価格の表示のついた数点を除いては、著者と書名で表されているものが大半である。書名に関しては、多くが非常に長い題名であるため、それを短く略した形でのエントリーとなっている。たとえば、“Valentine's Devotions”は、より正確には“Henry Valentine's *Private devotions digested into six litanies*”である。“Mr. Rushworth's *Historical Collections: The Second Part. Fol.*”は“*John Rushworth's Historical collections of private passages of state, weighty matters in law, remarkable proceedings in five Parliaments beginning the sixteenth year of King James, anno 1618, and ending*….”のようになる。また、著者名・書名の両方に関して、スペリングはオリジナルまたは今日の表記と必ずしも一致しない。また、多くの作品および著者が現在では研究されていないことや、さらにはチズウェルが出版者としてフロントページに名前を出さないもの(/販売のみを扱っていたケース)もあるために、データベースを利用してもなお書籍の特定が困難なものがある。そのため一部詳細が不明なものがあるが、2つのリストに掲載された書籍に関してはつぎのように分類・分析することができる。

①サイズとその特徴

1680年と1681年のブックリストには、全部で146の本が掲載されている。[7] 本はサイズ別に、大型のフォリオ版から小型本への順に紹介されている。リストの最後には新刊本または印刷中といった分類でサイズの区別をせずに紹介する部分がある。フォリオ判(Folio)は二つ折り本で、たて40センチ×横25センチ程度である。クォート判(Quarto)は四つ折本でフォリオの半分であり、つぎにオクテイヴォ判(Octavo, 八つ折)、さらに12折判(Duodecimo)、16折判(Vicesimo)に続く。最後に新刊本の紹介があり、新刊本についてはサイズを明記していない場合が含まれる。この理由により、146冊中、11冊はサイズ不明である。

残り135冊をサイズ別に見ると、最大のフォリオ判の書籍は27冊ある。クォート判は37冊、オクテイヴォ判が59冊、ドゥオデシモ判が9冊、ヴァイセシモ判が5冊ある。もっとも数の多いものはオクテイヴォ、続いてクォート、フォリオとなっている。

多くの場合、書籍のサイズは値段と比例している。たとえば、1674年のチズウェルのブックリストで、値段つきのものを参考にすると、オクテイヴォ判が3.5シリングから4ペンス程度であるのに対し、大型のフォリオ判は10巻本で16ポンドというものから最低価格でも8シリングである。一方、フォリオの次に大きなクォート判の場合、4ポンドの全集を筆頭に6ペンスまでと値段もサイズもフォリオとオクテイヴォの中間になっている。

書籍は値段により読者層が限定されたことが推測できる。つまり、王政復古期にロンドン市民に普及したブロードサイド判(大判の紙一枚の印刷物)が1ペニーであったことからすると、高価なフォリオを購入できる読者は非常に限られた一部

の層であり、サイズも値段も中間に位置するオクテイヴォがもっとも多く普及したのは当然であったろう。

もっとも高価なフォリオ判は王族、貴族をはじめ、地方のジェントルマン階級、上級の聖職者、富裕商人等を読者層としていた。リスト上のフォリオ版書籍の内容は、宗教、歴史関係が主体である。ひとつには同時代史といわれる近い歴史を振り返って過去の事件・出来事を再評価するような文献が目立つ。これは1640年代の革命から共和制時代を経た王政復古期の特徴と考えられよう。また、17世紀終わりの四半世紀は古典が見直された時代でもあり、それを反映するように英語・ラテン語辞典が含まれている。フォリオ版のこの辞典は、英国国教会司祭フランシス・ホリオウク（Francis Holyoake, 1573-1653）が作成し、1606年に初めて出版されたものである。ホリオウクは1627年に改訂版を出版、その後1648年まで数回版を重ねた。彼の没後、息子のトマスが改訂・増補版を出すことを目指したが、それが実現したのは1676年、さらにその息子のチャールズの手によるものであった。

②主題別分類

1668年から1709年までのロンドン書籍商による出版物は、多い順に宗教・神学関係、歴史、数学、古典、詩という分類の順であると既に述べたが、チズウェルの1680年、1681年のブックリスト上書籍を主題別に分類すると、やはりキリスト教関連書籍が最も多く70余点あり、全体の約半数を占める。なかでも説教の数が多い。バーネットのほか、ジョン・ケイヴ（John Cave）やロバート・サンダスン（Robert Sanderson）が複数の書籍の著者となっている。また、初期の教会の歴史を扱うもの、教父についてのものも目立っている。時代を反映するものといえばやはり宗教的論争書が挙げられる。英国国教会の司祭による著作がほとんどであり、例外的に非国教徒であるリチャード・バクスター（Richard Baxter）の書籍が含まれている。また、チズウェルのブックリストにはとくに反カトリックの立場から論を展開する書籍が多い。これは特に1680年という時期がPopish plot直後にあたることもあろう。ジョン・ウィリアムズ（John Williams）のように、カトリック教会と英国国教会の相違点を明らかにし、プロテスタント教会としての国教会の位置づけを確固たるものとしたい意思を表明した著者の作品もリストには複数含まれている。Popish plotに関する書籍は複数あり、ウィリアムズやバーネットをはじめ、ヘンリー・ファウリス（Henry Foulis）らも執筆している。

チズウェルのリストの上でも、宗教・神学関係書籍の次に数が多いものは歴史関係書籍である。20点ほどを数える。その中でも同時代史は王政復古期の特徴的主題のひとつであり、ジョン・ラシュワース（John Rushworth）の *Historical Collections* など、イギリス革命論争がすでにこのときには始まっていたことが裏付けられる作品が含まれている。これは、第一部が1659年に刊行されており、当初はリチャード・クロムウェルに献呈されていた。1618年以降の歴史的資料をまとめたもので、国王チャールズI世の処刑にいたるまでの議会での協議、演説、文書などありのままに伝えるという作品である。これは歴史を物語ではなく事実としてありのままに語るもので、イギリス革命に関して著者の意見をさしはさまず事実を記録したものになっている。1680年以降も、1692年、1701年に第2部、第3部が出版された。ラシュワースは歴史を事実に基づいて書くという同様のアプローチで、ストラフォード卿の裁判についての書物 *The Trial of Thomas, Earl of Strafford* も残している。ラシュワースは中立な立場の歴史家として、事実を書き残し、読者に歴史的事件の判断を任せる、という方針で執筆を行った。

また、大きくは歴史の一部として分類されるであろうものに好古趣味的（antiquary）そして系統学的（chronology / genealogy）書籍がある。これらの本からは、王政復古となったイングランドにおいて、様々な歴史を再確認することによって国家のアイデンティティーの確立を人々が求めていたことがうかがえる。系統学的なものではウィリアム・ダグデイル（William Dugdale）の *Baronage of England* はイングランドの貴族の起源を遡り、

サクソン期からの系譜をたどる作品である。これはジェントリー階層に好評であった。また、リチャード・ベイカー（Richard Baker）の *Chronicles of Kings of England* も地方のジェントリーに愛読されたものである。これは最初 1643 年に当時皇太子であったチャールズに献呈されたものであるが、当初はローマ支配化の英国からジェイムズ一世の治世までを扱うものであった。その後つづきが付け加えられ、1684 年までには第 8 エディションまでが発行された。また、このリストのものは 1679 年の第 7 エディションである。これら 2 冊に関しては共通した王政復古期的要素がある。それは、共和制時代に抑圧されていたもの—国王、そして貴族—に対する思い、興味、知的欲求と考えることができよう。さらにはロバート・ケアリ（Robert Cary, 1615-1688）の *Palaelogia chronica* はアダムとイヴの創造を紀元前 5708 年とするなど当時から創世記までの「時」の位置づけを行った。

主題別ではつぎに科学・医学関連が多い。王立協会の影響が現れたものであろう。フランシス・ベイコン（Francis Bacon）の『学問の進歩』（*The Advancement of Learning*）も含まれている。その他、医学が一般に普及してきたことを示す文献として、著者不明の *The Countryman's Physician* の例を挙げると、この本は都市部から離れた地域に住み、容易には医師の診察を受けられない人々のための家庭用医学書である。その他、英羅辞書、地図・旅行、法律、哲学など 2、3 点ずつがエントリーしている。

③著者別分類

リスト上の書籍を概観すると、著者が重複した例が含まれているので、それを除けば著者数は 92 となる。純文学系ジャンルの書籍がほとんどないので、文学史に出てくる作家が少ない。ギリシャ・ローマ作家を除外した場合、オックスフォード英文学史シリーズ *Restoration Literature 1660-1700* に名前が登場するのは約 6 分の一の 15 人にとどまる。ただし、リストの書籍は文学史上の評価がされていなくても、歴史上は意義のある作品群である。ほとんどの著者が DNB のなかでは確認することができる。

リストの中で著書の数が一番多いのはギルバート・バーネットで合計 11 冊である。バーネットについてはブックリストを紹介する際に簡単に触れたが、国教会穏健派の司祭であった。ソールズベリの司教も務めている。歴史家としても知られ、11 冊のうち最も重要な書籍はイギリスの宗教改革史 *The History of the Reformation of the Church of England* である。この作品は当時の宗教論争から執筆された。1670 年代後半、バーネットはすでに反カトリック的思想を持っていた。英国国教会の正統性を否定した書物を論駁する作品の執筆を計画し、1677 年に構想を始めた。第 1 巻はヘンリー 8 世の時代を扱うもので、1679 年に出版された。ヘンリー 8 世についてはその欠点を認めながらも神意を実現した人物とした。それに続く第 2 巻は 1681 年に出版された。エリザベス朝を扱っている。宗教改革を擁護する立場で書かれたこの作品は出版されるや大変な評判となった。第 1 巻は 1678 年のカトリック陰謀事件、Popish plot のすぐあと、1679 年 5 月 23 日に出版されたこともあり、宗教改革によりカトリック教会から逃れて独立した英国国教会の歴史というテーマが多くの読者の共感を得た。第 1 巻、第 2 巻ともにフォリオ版で出版されたが、第 2 巻などは初版の 2 年後の 1683 年には再版されている。国内での評価も高く、この作品によってバーネットは議会から謝意を表され、オックスフォード大学からは神学博士号が授与された。彼は 1715 年に亡くなるまで約 140 点の著作を出版した。チズウェルはバーネットの主要出版業者であり、このリストが作られた 1680 年以降の作品も数多い。

バーネットの次に著作の点数が多いのはデンズル・ホールズ（Denzil Holles）の 4 点、ウィリアム・ケイヴおよびジョン・ケイヴの 3 点となる。ウィリアム・ケイヴは英国国教会司祭である。ケイヴはチズウェルが大事にした著者のひとりであり、17 世紀から 18 世紀にはよく知られたキリスト教作家であった。特に *Antiquitates apostolicae* と *Primitive Christianity* は広く読まれ、のちに何度も再版を重ねた。前者は国教会司祭ジェレミー・テイラー（Jeremy Taylor）の作品で、キリス

トの生涯を描いた *The great exemplar* の第5版（1675年）を増補する形で、ケイヴがキリストの弟子たちの生涯を書いたものである。また、*Primitive Christianity* はケイヴ最初の作品であった。やはり初期の教会を扱うものである。リスト上のもうひとつの著作、*Tabulae ecclesiasticae* は1674年に出版された短い本で、キリストの生誕から1517年までを世紀ごとに区切ってキリスト教作家を紹介する表となっている。

3．チズウェルの周辺：他書籍商のブックリスト例

DNBのデータから判断すると、王政復古期ロンドンの主要な書籍商は40を超えると思われる。それぞれが100から1000の出版物を扱っている。王政復古期の日記作者サミュエル・ピープス（Samuel Pepys）が実際に訪れたり親交を持っていた書籍商で、その日記で名前を挙げているものに、ヘンリー・ヘリンマン（Henry Herringman）、ジョシュア・カートン（Joshua Kirton）、ジェイムズ・アリストリ（James Allestry）などがいるが、その中でヘリンマンのブックリストの一例を挙げる。[8)]

ここではヘリンマン（bap.1628-1704）の1684年のブックリストを見たい。ブックリストは詩人サー・ジョン・デナム（Sir John Denham）による *Poems and Translations with the Sophia* に添付されている。この本は、デナムの詩および古典の翻訳部分と、戯曲Sophiaの合本という形になっている。このブックリストは、本の巻末ではなく、詩と翻訳の部分と、戯曲の部分の中間に挿入されている。4ページにわたるリストには、著者別に全部で82の書籍が掲載されている。すべて戯曲である。このリストからはヘリンマンが文学を専門に世に出した書籍商であることが推測される。また、このリストのみから単純に本の数だけ見れば、ヘリンマンがチズウェルよりも小さな規模で商売をしていたことも推測される。ところがこの推測は事実に反する部分が多い。

ヘリンマンは500冊以上の書籍を出版している。ESTCによればこのデナムの本が出版される1684年までに379冊ほどの本を世に送り出した。つまり、このリストに掲載されたのは82種類の書籍であり、その時点での出版物のうちのほんの5分の1であった。4ページを使いながら戯曲のみ、しかも82冊だけの宣伝を行うという方法をとった。これはかなり購買層のターゲットを絞ったやり方であり、広い領域の主題をカバーするリストを提示するチズウェルの宣伝方法とも好対照をなす。

ヘリンマンは文学を専門とし、17世紀の主要詩人群、エイブラハム・カウリー（Abraham Cowley）、リチャード・クラショウ（Richard Crashaw）、ジョン・ダン（John Donne）などの詩集、その他ベン・ジョンスン（Ben Jonson）、ウィリアム・ダヴナント(William Davenant)の戯曲を扱ったが、彼は特に書籍商としての経歴の後半においては利益追求よりもむしろ純粋な文学の復興のために尽くした。1666年のロンドンの大火では多くの本が焼失したために、彼はその後の1678年以降はほとんど新たな版権を購入せずに英文学の名作の復刻に努めている。チズウェルと比較すれば扱った書籍の主題は文学に限定されている点で狭い。その一方で、書籍商がビジネスのためだけではなく、公の利益、ここでは文学の復興のために出版を行ったという事実を証明している。

まとめ

ブックリストに掲載された書籍は王政復古期という時代性を大いに反映するものである。とくに宗教関連書が多いが、中でも説教集の占める割合が非常に高く、しかも大型のフォリオ判から16折判といった小型本まで様々な種類そして価格のものがある。高価なものは貴族階級をはじめ教会上層部の聖職者、裕福は商人などの購買層があり、一方、廉価なものにはより広い読者層があったことが推測できる。宗教は当時のあらゆる階層の人々にとっての日常的関心事であり、それは教会で説教を聞くのを楽しんでいたピープスやジョン・イーヴリン（John Evelyn）の日記からも窺える通りである。説教集は一般市民はもちろんのこと同じ聖職者の間でも広く読まれていた。実際に公の場

で聞くことができなくても、著名な聖職者の説教を活字で、または朗読で鑑賞したのである。また、初期の教会史や教父についての書物も複数あり、より古い歴史をたどる一種好古趣味的な傾向もある。チズウェル個人の宗教的立場は出版物を見るだけで断定は困難であるが、アングリカンであることは間違いないだろう。ただし、バクスター（Richard Baxter）など非国教徒の著作も複数出版を行っている。[9)]

また、歴史関連書籍については、とくにイングランド激動期の17世紀中期までを振り返るような同時代史的な作品が目立つ。宗教改革をはじめ、チャールズ一世の処刑に関する裁判の経緯など複雑なイングランドの歴史を再確認する著作も多い。また、歴史を物語ではなく事実として扱うというアプローチで書かれた歴史書も現れている。また、1678年のカトリック陰謀事件という宗教的・歴史的事件の直後にあたる時期のブックリストであるため、この出来事を扱う書籍は多い。

当時出版物全体の数パーセントの割合を占めていた詩については、このブックリストには見つからない。数学はJames Hodderの*Arithmetick*1点のみである。純文学系はイギリスのものはなく、ギリシャ・ローマ古典の作品が並ぶ。ギリシャ・ローマ古典は複数あり、オヴィディウス、ホラティウス、クセノフォンなどイギリスルネサンス期以来注目されてきた著者の作品群が掲載されている。さらに、英羅/羅英辞典が3種類あることは、古典についての関心や注目度の高さを裏付けている。

この小論において分析を行ったリチャード・チズウェルの1680年および1681年のブックリストに掲載された出版物の傾向・特徴は、時代の傾向に逆らうものではなかったことがわかる。また、たとえばヘリンマンのリストと比較しても、チズウェルが幅広い主題の書籍を扱っていたことは明らかである。1680から1681年頃はチズウェルの書籍商としてのキャリアの中間的段階にさしかかった時期であり、出版物の総数も200に満たない程度である。やがて義父である書籍商リチャード・ロイストン（Richard Royston）の仕事を引き継ぐ形で膨大な数の本を扱うようになり、徐々にロンドン書籍業界でも際立った存在感を築いていったわけだが、この時点のブックリストから垣間見ることのできる彼の個性はヘリンマンの例と比較すれば確かに漠然としている。ただし、様々な分野を偏りなく扱ったからこそ、チズウェルのブックリストは当時の出版事情と同様に王政復古期の時代思潮を現代に伝える、歴史的価値をはらんだ貴重な資料となっている。

注

1）James Raven, "Publishing and bookselling 1660-1780", *The Cambridge History of English Literature 1660-1780*, ed. John Richetti (Cambridge UP, 2005), p.13.

2）本研究をすすめるにあたり、17世紀英国出版事情研究の第一人者であるインディアナ大学Peter Lindenbaum教授から調査方法等に関して様々な助言をいただいたことに謝意を表したい。また、出版物の詳細は主にWing's Short Title CatalogueおよびEnglish Short Title Catalogueを参照して確認した。

3）本論で使用する「書籍商」ということばは、原語でのpublisherまたはbookstellerにあたるものとする。

4）トマスンはイギリス革命関連文書を蒐集したことで知られている。チズウェルがこの店の経営者となった経緯は定かではないが、St. Paul's Churchyard地区の同一名称の店であるため、二人の店は同じものであると考えることが自然であろう。17世紀のSt. Paul's Churchyard付近の書店の状況についてはPeter Blayney, *The Bookshops in Paul's Cross Churchyard* (London: Bibliographical Society, 1990)が詳しい。

5）ブックリストはあらゆる出版物に添付されているわけではなく、チズウェルの場合は800超の出版物中121にリストが確認できる。

6）Tony Claydon, *William III and the Godly Revolution* (Cambridge UP, 2004), pp. 85-86参照。

7）一年違いのリストであるため、中には多くの本が重複して含まれている。146は重複したものを1種類とカウントした結果である。

8）ピープスはセント・ポール界隈にもたびたび足を運んでいるが、日記の中でチズウェルの店の名を出してはいない。ピープスは読書を好み様々な書籍について言及していて、1667年の9月に彼はJohn Guillimの紋章図案集、*A Display of Heraldrie*を妻のために購入したと記している。ピープス夫人は紋章（heraldry）に大変興味を持っていたらしい。この本はチズウェルのリストに掲載されているが、初版は1610年であったもので、著者の没後（1620年以降）もた

びたび増補・再版され、18 世紀半ばまで紋章に関する書籍の決定版といった存在であった。283 ページのフォリオには 500 超の図案が含まれている。

9）なぜ一種相対する思想を持つ宗教家の作品を扱ったかということは、今後さらなる研究によって明らかにしなければならない課題である。

Selected Bibliography

Blayney, Peter W. M. *The Bookshops in Paul's Cross Churchyard.* London: Bibliographical Society, 1990.

Claydon, Tony. *William III and the Godly Revolution.* Cambridge: Cambridge UP, 2004.

Lindenbaum, Peter. "Authors and Publishers in the Late Seventeenth Century, II: Brabazon Aylmer and the Mysteries of the Trade". *The Library* March 2002, 32-57.

Maclean, Gerald, ed. *Culture and Society in the Stuart Restoration: Literature, Drama, History.* Cambridge: Cambridge UP, 1995.

McKenzie, D. F. *Making Meaning: "Printers of the Mind" and Other Essays.* Edited by Peter D. McDonald and Michael F. Suarez. Boston: University of Massachusetts Press, 2002.

Parry, Graham. *The Trophies of the Time: English Antiquarians of the Seventeenth Century.* Oxford: Oxford UP, 1995.

Plomer, H. R. *Dictionaries of the Printers and Booksellers Who Were at Work in England, Scotland and Ireland 1557-1775.* London: Bibliographical Society, 1977.

Raven, James. "Publishing and bookselling 1660-1780", *The Cambridge History of English Literature 1660-1780.* Edited by John Richetti. Cambridge: Cambridge UP, 2005. pp. 13-36.

Sutherland, James. *Restoration Literature 1660-1700: Dryden, Bunyan, and Pepys.* Oxford: Oxford UP, 1969; rpt. 1990.

ハンター、M.『イギリス科学革命』大野誠訳、南窓社、1999 年。

リチャードソン、R.C.『イギリス革命論争史』今井宏訳、刀水書房、1977 年。